

## 麻菜ちゃんの ラリベラ生活日誌

鈴木 麻菜 (すずき・まな)

2001年10月から2004年3月まで赴任  
倉本聰さんの劇団「富良野塾」で学んでいた女優の卵だった彼女。  
24歳の若さで2代目駐在員に。慣れないエチオピアでの生活や仕事  
にも決して弱音を吐かず、黙々と仕事をこなしていた負けず嫌いの頑  
張りや。1977年福島県生まれ。



### 1 2001年12月1日号掲載

こんにちは。お元気ですか?今日のラリベラ、屋  
過ぎにいきなり激しい突風が吹き出し、いつもは開  
けっ放しの事務所の窓も、夕刻になっても吹き止まず、  
閉め切ったままです。今は乾季なので、もしこれが  
雨季ならばダーッと雨が降るらしいのですが、残念  
です。そんなことはおかまいなしに村人たちはいつ  
もと同じように穏やかに通りを行ったり来たりして  
います。

初めまして。鈴木麻菜です。富美さんの後任とし  
て「下見」を兼ねて参加した7月の植林ツアーから  
早3ヵ月。仕事を引き継ぐという点と言葉の不安は  
あったものの、日本でラリベラで生活することを思っ  
ても、まだその時点では全く実感がわからず、ただエ  
チオピアに行けるということだけで舞い上がってい  
た気がします。そして、ここで日々を重ねていると、  
今まで想像していたことが、どんどんリアルに私の  
目の前に現れ、積もって行き、頭の中はパンパンです。  
が、しかし、富美さんを含め、現地スタッフも“ア  
イズシ(心配ない)”ととても寛大です。その気持  
ちに甘えつつ、甘んじず頑張っていきたいです。

プロジェクトも3年目に入り、活動も村人たちの  
コミュニケーションもだいぶ安定してきたようで

す。今は、昨年(エチオピアは9月から新年)の活  
動を見直し、今年度の計画を練っているところです。  
この間、7月に植林をしたゲテルゲ小学校に視察に  
出かけました。まだ苗木で15センチくらいしかな  
かった「アカシア」が、たった3ヵ月で1メートル  
に育っているものもありました。木も人と同じよう  
に個人差があり、天候、土壌環境によって、成長の  
速度は異なりますが、こうして小さくてもその木な  
りのペースで確実に成長している姿を目にすると、  
大人になった今の私でも成長し、向上し続けていき  
たいと願うのでした。

何もなかったところから築き上げてきたFFF。  
その土台があることに安住せず、そこから、ここ  
からまた、カスバカス(少しずつ)築き続けて行きた  
いです。これからも末永く応援して下さいね。

家畜の鳴き声、鳥のさえずり、人の声が入り混じり、  
アシェテン山から朝日がぼっかり顔を出すと、ラリ  
ベラのいつもの朝がやってきます。

お元気です!

※カタカナ部分はアムハラ語(現地語)です。

### 2 2002年2月1日号掲載

こんにちは。いかがお過ごしでしょうか?

事務所の一部屋の机を与えられ、事務関係の仕事  
をこなすのは専らこの机の上。机に向かうと目の前  
には木でつくられた窓が一つ。ガラス窓ではないの  
で開かないと仕事ならず。その窓から見える視界  
は限られているので、まるで舞台を観ているか、固  
定監視カメラの気分。風に揺れる木々の姿、光を浴  
びた山々、こう飛んでくれと言わなくても飛んでく

れる鳥たち、でっかい雲、青く澄みきった空。毎日  
同じようでも決して同じではなく、刻々と変化し1  
日を閉じる。感じることも毎日違うのです。私自身、  
コレ、お進めです。たとえば、人の行き交う雑踏の中。  
満月の日、初日の出を待つように月の出を待つとき。  
自然の音響と証明が入り、何かが見えるかも…。こ  
んな風にラリベラでは穏やかに日々を過ごしており  
ます。

最近村ではちょっとした変化が起きています。まず一つは、村人たち自ら苗畑を作りたいと言い、自ら動き出したこと。FFFでは、サポート役としてスタッフの派遣と野菜の種の提供。役場の人と話した結果、野菜の種だけではなく木の種も植えてもらえることに決定。木とロープで目安をつけ、男たちが耕す。女の人と子供たちは固まった土を石でほくし続ける。初日、その数は優に200人は超えていたはず。村人たち自ら、という姿を目にし感動を覚えた。

二つ目。今、村のあちこちに小さなグループがいくつも出来ている。基本的な趣旨は、村を良くしていきたいという思い。村の中の環境に目が向けられていて、トイレの建設、観光地としての在り方、勉強会の開講など様々。その活動の一つに、あるグループが早朝ゴミ拾いを始める。週4回も…。 “親の背を見て子は育つ” の言葉の如く、大人もこうして頑張っ

ているのです。村人たち自ら生まれたもの。村人たちが今、自分たちの村に、足元に目を向け始めた。自然に頼って生きている私たち人間。どんなことを何を私たちは選んでいるのだろうか。小さなことでも良い、行動していこう！

最後に本の紹介をさせて下さい。

「川は生きている」「道は生きている」「森は生きている」 富山和子著（講談社・青い鳥文庫）

昔に戻ることはできないけれど、道はあるはず。裸になってしまった山は、植林をして100年でうっすら木々に覆われる程度。緑深い森になるためには、人の一生では足りません。絶え間なく流れる川のように、人の思いも受け継がれ、ラリペラに森が復活するのを願うのです。どうぞこれからも末長くお願いいたしますね。それでは、また。

### 3 2002年4月1日号掲載

ラリペラにいると何もかもがスローモーション。風景も、人の流れも、それゆえに、様々な日常でのドラマを垣間見ることができる。言葉はわからなくても、表情だったり、行動だったり…。話せない分、そういうものを全身で感じながら生活しています。

言葉は単なる音の組み合わせ。音楽も同じ。それなのにせいかにはこんなにたくさんの言語が存在する。それぞれ自国の言語を持つ。それが文化となり、色となり、個性となる。言語の違いは見えない壁を作りうる。人がいてもその人が存在しないかのように、言語は同じ言語同士で交信する。言葉が通じるということは、鍵穴に鍵をさし、音を立てて開くときのように気持ちの良いもの。3つの言語の中に生きている私。

長い乾季の後の小休止。夜な夜なやってくるスコールのような激しい雨。次の乾季の合間の小雨季。山

の学校の畑も、皆喜んでいる。そして人も。そんな恵みの雨なのです。FFFとしては木の種をまき、苗床を作ろうとしています。こうして「少しずつ」でも木を植えていく行為。今はまだ際立って目には見えないけれども、10年20年後が本当に楽しみです。

富美さんから引き継いだ手芸教室。縫い目は何とも言えず、すごい縫い目なのですが、皆、楽しくてたまらないらしく、次のデザインは？と後をたちまかせん。何もなかったところにこうして、道をつくっていくということは本当に大変なことだと思う。その反面、すごく面白く、誰でもできる体験ではないけれども…。皆それぞれがそれぞれにしかできない経験をしている。—それがその人の道なのかもしれない—。

ラリペラでの穏やかな時の中ゆったりしながら…。それでは、また。

### 4 2002年6月1日号掲載

「生産することをしなくなっちゃったからね。紙幣食べて生きてるわけじゃないんだから」。

同じく海外で援助活動をなさっている方と話したとき、その彼女の一言。ドキッとした。そうだ、そうなんだと思った。—生産すること?—

昨年11月から始まった村人たちの畑作り。荒地だった窪地も見違えるような立派な畑となっています。畑の中に転がっていた石は野生動物から作物を守るためのフェンスに。これは主に女性や子供たちの仕事。夜警のための小屋も立てられ、村人たち自

身で交代で守っている様子。今年の1月から採用した新人ウオンドルを筆頭に、男たちは新しい苗床作り。この畑は結構急な斜面を下ったところであって、往復するのもちょっとした山登りといった感じなのですが、皆、何ともないといった感じ。私なんて上りも下りもずるずるすべりながら、いつもヒヤヒヤしているのに…『足の裏の構造自体違うんだよ、吸盤でもくっついてるんじゃない?』と、よく富美さんと話していたものです。この間なんて、『登りじゃまさか滑らないでしょう』と、たかをくくっていたばかりに、砂地でしかも乾季なのも手伝って、奇声とともに数メートル下っていったのでした…(少しショックだった)。

先日、以前手芸教室に通っていた女性がお茶に誘ってくれたので、彼女の家を訪ねてみた。ひっそりとした一人暮らしのたたずまい。お茶を飲みながら話をしてしていると、彼女は眉間にしわを寄せ、切実な顔をして言うのである。「仕事をちょうだい。お金になる仕事がほしいの」と。そのときの私には何とも答えられることができず、

「考えておくから」とだけ言って彼女の家を後にした。

村にはきっとこういう女性(男性も)がたくさんいるのだろう。すべての人が豊かでは決まっていなくても、生きることはそれほど困ってはいない。

生きることは食べることだと私は思う。そして食べることは作ること=生産することだと思う。日本では買い置きが可能で有効でもあるけれど、ここではそうはいかない。週に一度の市場では、加工されていない原料が売られているのである。それらのものが口に入るまではさまざまな手間と時間を要する。それだけの時間と人の手がここには存在するのだけれど。仕事があって、それがお金になれば本当に幸せですか?鳥はその小さな足で移動しながら食べものを探し、ついばむことができるけれど、私はおなかですいても、食べ物をとることができない。

そんな村での風景の中、私はここでの時間を過ごしています。植林時のための苗木たちもすくすくと育ち、今年も雨季の本格的な植林に向けての準備が着々と整いつつあります。

5

2002年8月1日号掲載

エチオピアではどの家庭でもブンナ(コーヒー)を頂く。日本のようなインスタントコーヒーではなく、こちらは豆から始まる。はじめに豆を洗い、次に『ブラムタドゥ』という名の薄い鉄製の皿にのせた豆を炭火で煎る。豆の色が変わり、同時に香ばしい香りが漂ってくると煎り終え、その香りを手で扇ぎ周囲の人たちに香りまでも味合わせてくれる。そして、煎った豆を『ムカッチャ』と言う木製の筒に入れ、『ディジノア』と言う鉄の棒でつぶして粒状にしていく。このときの音が、事務所のある2階まで響いてくるのだが、鼓動のように心地よく間接的に体に響く。この間に炭火で沸かしておいた湯の中につぶしたものを入れ、しばし待つ。湯気が昇り沸騰したら、火から下ろし少し蒸らす。『ジャバナ』(素焼きのポット)から注がれる出来立てのブンナを目で味わい、甘いものが少ないエチオピアでの唯一の楽しみかのように砂糖をたっぷりと入れていただく。しっとりとした味わい深いブンナが口中に広がり、甘みとともに下降していく。通常3回いただくのが作法で、次のブンナが出来上がるまでおしゃべりを楽しんだりして待つ。これら一連の流れを『ブンナセレモニー』

と呼び、お客様が来たときには必ず行う。彼らにとっちは文化でもあり、それとは別に日常的な側面も持ちえる。「ネィ、ブンナタッチ(コーヒーを飲みにおいでよ)」と呼ばれていくと、1時間は優にお邪魔してしまう。それでも人を迎えるということを日常に、そのゆっくりとした時の中で消えずに残っていることに、祖国を顧みるのでした。

ある日、FFFが植林した場所の貯水池が涸れてしまった。水遣りができない=木が枯れてしまう。干上がったコンクリートの貯水池を前にして、何ともいえない気分が陥った。水という自然の恵みは、人の営みだけでなく心までも潤してくれる。ラリベラで水を得る方法は二つ。一つは水道から得る方法。もう一つは、湧き出た水がたまったところからポリタンクや水瓶にくみそれを運んで使う方法。前者は水道料金なるものを支払うが、後者は、時間と労力のみで自然の恩恵を受ける。それから私は、ラリベラへの水の経路が知りたくて小さなたびに出た。水源だと思われる場所の近くに住む村の青年に案内してもらい目にしたのは、原始のようなささやかな光景だった。地面からしみ出る水の周りには雑草が生え、

そのまま水脈が見える。そのささやかな水が、ある一定のところに溜められ、その後パイプを通してラリベラまで下っていく。雨が地中を潜り抜け、やっとうして日の目を見、私たちに潤してくれる。少し小高い所に登り、自分の住んでいる町を見下ろし

てみるのもいい。このすべての家に十分な水はどこから来るのだろうか。その足元の水源に出会えるかもしれない。

今年の日本の夏はいかがですか？水に輝く遠い国につぼんへ。

## 6 2002年10月1日号掲載

こんにちは、皆さん。お元気でお過ごしでしょうか。ラリベラに着いてしばらく時間が経とうとしています。私の2年目が始まったのですが、昨年とひとつ違う点は隣に富美さんがいないこと。1年で大分許容範囲が増え、土台が出来た分、大抵のことは、うまくかわしたり、受け入れたりできる。でもやっぱりたまってしまうものがある、それは、思いもしないような時に突然飛び出してくる。

村を歩けば挨拶が絶えない。「オー、マナー！！」から始まり、元気だったの？体は？家族は？日本は？フミコは？フルフルデナー？（全部、良い？）と続く。そうだよと言って返事をすると、それは良かったとさぞ満足そうに去っていく。人より車のほうが少ないから人々の営みが聞こえ、人が歩くその速さの隙間に息づく風習。忙しい日本の分刻みの生活人たちにも、この穏やかさ、味わっていただきたい。そんなことを書いていると、階下からコーヒー豆を煎っている香りが鼻をくすぐる。

ある日の朝、私は日本事務局へ電話をかけ終え、帰路に着いた。どうしても早く仕上げてしまわなければならない仕事のひとつあり、しかし中々、物事が思い通りに進んでいない時だった。歩きながら考

えるのはそのことばかり。息詰まり、途方に暮れ、とうとう道で立ち止まり泣き出してしまった。するとたまたま通りかかった隣の家の子がその私をすぐ側にある診療所に行こうと言って、私の手を引き（私は物も言えぬまま連れて行かれる。もちろん具合が悪いわけではなかった）、院長までやってきて、英語で何とか話を聞き出そうとしてくれたのだが、言葉にならない想いは、涙と泣き声にしかならない。見兼ねた看護婦は「ストレスよ」と言い放った。凶星だった。いつもは元気で平気なのにどうしてだろう。人生でそういう日がたまにやって来る。泣きたいだけ泣いたら少し落ち着き、今度はちゃんと歩いて帰れた。あんなに子供みたいに泣いて…あー、伝説になってしまうかもしれないと少しだけ後悔した（今は笑い話！！）。

天の恵みをたっぷり受けた木々は、私の背を優に越えているのもあつたりと様々。そしてまた厳しい乾季への突入。植林が終わり木々が根付いたら、今度は育林が課題かなと今思う。ラリベラについてその日、乾季には珍しく雨季に降るような雨が降った。迎え火ならず、迎え雨かな、なんて思ったり。4年目のフー太郎です。

## 7 2002年12月1日号掲載

こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？エチオピアでの1年が終わってしまいました。こうして日本にいて、自分がラリベラにいたなんて全く実感がわきません。まるでずっと日本で暮らしていたかのようなこの変な感覚。しかし、あの時が止まったかのようなラリベラでの時間は、今日もきっと何も変わることなく遂行している…。

今年も植えてきました！今年は約3万5千本。小さい芽や苗木は本当にかわいい。皆、まっすぐ立っている。空に向かって伸びている。3月に種を蒔き、

苗木を育て始める。植林時期の約1ヵ月前から場所を決め、そこに穴を掘り雨季を待つ。そして雨季がやってきて十分に雨が降り、雨が大地にしみこんだらいよいよ植えるのです。村人の手で1本1本。今年は植えた本数が少なかったため、これを反省し、来年に備えたいです。それから大雨季の前にある少雨季、この時期に焦点を当てて植林しようという計画も思案中。この計画が実現したら、ラリベラの緑化も2倍の速さで進んでいくことになる。

スタディツアーレポート。今年は4名の支援者の

方が参加してくださり、ラリベラ環境クラブの子供たちとたくさん植林をしました。子供たちは本当に喜んで、日本人の周りには黒山の人ばかり。言葉はわからなくても、おんなじ人間なんだなあと思ったり。時間を忘れる位、皆で植林したら、お待ちかねのノートがもらえる。1人2冊ずつ、フー太郎特製ノートを手にして帰る子供たち。たくさん勉強できるといいね！また来年ね！

子供たちの植林風景とは打って変わって、村人たちの植林風景は地味である。老人と言っても過言ではない人たちほとんど。ちゃんとした農機具もなく、鉄棒の細いようなもので穴を掘り植えていく。全く

もって地味である。しかしこの行為こそが稀少なのだと感じた。机の上の勉強や頭の中の妄想も、全くいらぬとはいえないが、それだけでは見えないことがある。土の上に立ち、地面に穴を掘り、小さな木を植える行為によって体感としてその人の中に残っていく。この植林活動が、毎年やってくる盆踊りのように、楽しみでそして永続的に続いてくれればいいなあと思うのです。その道標ともいべき今の活動をよりよいものにしたい。これが2年目の私の目標です。

それではまた、時が止まったかのようなラリベラにタイムスリップ☆☆☆

## 8 2003年2月1日号掲載

年が明けてしまった。あれよあれよという間にラリベラでの1年生だった私は、とうの昔のどこかに行ってしまった。初心というものは覚えていられないものかもしれない。

私が出来上がった会報を読むのは皆様のお手元に届いてから遅れること1ヵ月。大使館宛で送ってもらっているためだ。全号の生活日誌とエチオピアレポートを読み返し、我ながら少し情けなくなった。麻菜ちゃんは？ラリベラ事務所はちゃんと活動しているの？と疑問を持たれた方も多いのでは？というわけで、今回は「村人の声」を軸とし、ラリベラの現状を書いてみたい。

フミコがあまりにも有名だったために、1年前からフミコと呼ばれてはよく話しかけられた。大抵は「仕事をくれ」だったが、2年目になり1年目よりは言葉が聞けるようになってきた分、もっと具体的なことが耳に入ってくるようになった。現在造成中の中央公園の向かいに喫茶店がずらりと並んでいる。そこからの眺めもなかなかいい。以前はただのうっそうとした繁みがあっただけで、視界もささげられていたが、今やそこは明るい緑たちが眩しいくらいだ。「すごくいいね。造ってくれてありがとう」こんなこ

とを言われた日もありました。それから「公園のどこかにラリベラマスカル（十字架のモチーフ）を作ってくれない？」と言われた時もあった。こんな風にして、彼らの声が私の耳に届くようになってきたのだ。以前、教会のテラスの修復をし、これまた大変喜ばれたのだが、現在別のテラスの作成の案も出ている。自分の願いや思いが叶うということは、これほどうれしいことはない。需要と供給。

そういえば、私も中学生の時に市長への手紙なるものを書き、その案が実現してしまったことがあった。みなそれぞれがコミュニティー（地域社会）を持つ。自分の今いる環境に目を向けたとき、おのずと意見が浮かんでくるのかもしれない。より良いものにしたとすれば、こうして届いた声をどの位、実行に移していけるかわからないが、この声と共に活動していけば大丈夫な気がする。

前号で、迎え雨かななんて書いていたが、この雨たちは（1週間で止んだが）農民たちにとってはうれしいものではなかったよう。公園の完成が間近。各学校の畑の野菜たちも順調に育っている。私たちも森と同じように、少しずつ、ゆっくりと…。深呼吸をするように。

## 9 2003年4月1日号掲載掲載

来るのがわかっている人。街角で思いもよらずに  
出会ってしまう人。約束の時間に約束の場所で出  
会う人。人生において、人はいろいろな場所で出逢  
いというものを経験する。こんな狭いラリベラでも、  
私は必然のような偶然を何度か体験している。会  
いたいと思っていると道で偶然出会ってしまうよう  
に。待ちに待った年間計画のための香織さん来訪。  
突然の訪問者や久々の再会にしばし心を動かされ続  
けた今回の生活日誌。

溜めてしまった日本語がせきをきったように私の  
口から流れ出る(ためなきゃいいのに)。それでも慣  
れすぎてすごい。確実に去年とは違う受け止め方が  
できている。自分の変化を少しだけ誇りに思う。香  
織さんがいる日常が当たり前と思ってしまう。あま  
りにも満たされすぎていて。そして今回のこの時期  
に、思いもよらぬビッグゲストが登場する。誰が想  
像できたであろうか。隣町での村長の結婚式を終  
え、ラリベラ入りした翌朝、階下がなにやら騒が  
しい。ベランダからのぞいてみると、人だかりの中  
に一羽のフクロウの姿が…。すぐに2階に呼び、  
香織さんが買い取った。おびえる様子もなく、お  
となしい。「たぶん、いじめられなかったんでし  
ょう」と、香織さん。

その日から『フー子』と名づけられたフクロウは、  
事務所の片隅に置かれ私たちに潤いと安らぎを与  
えてくれている。それから1年ぶりに再会したクリ  
スティ。あのおおらかで自由な感じは全然変わら  
ず、今年によりナチュラルに透明に見えた。中央公  
園の仕上げ、それから2月20日には、「花の森」の  
工事が着工。またラリベラに彼らしい新しいポ  
イントが誕生することになりそうだ。この変化を  
村人と共に私は目にする事が出来る。「花の森」  
に立って人々は何を思うのだろう。

香織さんの来訪は、私の日本語の救いになっ  
たりもするのだが、プロジェクトを進めるにあ  
たって、軌道修正という大きな役割を果たす。  
散らばったものが、また新しい場所に戻り動き  
出す。今年のユニークな点は、各スタッフが自  
分の考えるプロジェクトを出し合って、それ  
を年間計画に載せたところ。このプロジェクト  
がどんな形を見せてくれるのか。今から私も  
楽しみである。未来は見えない。ある流れが  
目の前にやってきて、私はどうやらこの先  
も見届けることになりそうである。来訪者  
を待ちながら。

## 10 2003年6月1日号掲載

ろうそくの灯はやさしい——。ここ3ヵ月以上  
続いている「計画停電」によって、毎週金曜日は、  
原始疑似体験日と化する。圧倒的な水不足により  
エチオピア全域でこの停電が続けられている。  
(エチオピアは水力発電)首都のアジスアベバで  
さえもおこなわれているのだ。日本でやってみ  
たらおもしろいかも!と思っているのは私だけ?  
東京の夜のあの光の渦が消えたら、道行く苦  
労人も頭上に瞬く星たちに気づく時が来るか  
もしれない。こんなに闇で濃くて暗かったんだ。  
暗闇に行きかう人の声と虫の音、時折吹き抜  
ける風。人が造ってきた以前の世界が見える  
よう。生活を続けていくという視点から考えると、  
火と水は最も重要な根元になるものかもしれ  
ない。それらがなければ何もできなく、特に  
することがなくなってしまう。言い換えると、  
それらがなくなることによって、こんなにも  
忙しくなってしまうとも言えそうだが…、電  
気がなくても十分に生きていける

はず!

一昨年の秋、思いがけず「畑を作りたい」と  
いう村人の発言によって、300人以上の人が  
関わり動き出した村人の畑。しかし今年  
は、残念ながら同じ動きはなく、畑は作  
りたいが、水やり人夫の賃金を払って  
もらえないかと言う要請が出てきた。  
彼らにも彼らの生活があり、大変だ  
という。自発的に始まった活動に賃  
金を支払えば、それは雇用になって  
しまい、賃金なしには働かない状  
況が続いていくことになる。それ  
から私たちは、さまざまな提案を  
持ちかけつつ掛け合ってみたのだ  
が、返事が変わることはなかった。  
この活動についての注目すべき  
点は、村人たちからこの声があ  
がったところ。こうして村人  
たちを刺激(くすぐる?)する  
べく、FFFから様々なきっかけ  
になるような何かを提示してい  
けたらな、と思っています。

…そうして村に電気がやってくると、村人の歓声

で一瞬村がどよめく。原始の時は終わりを告げ、文明生活が幕を開ける。何によって人の心って満たされていくんだろう。

9 割方出来上がっている中央公園は、道行く人々の心を潤してくれる。欠けていく月に私たちは似ているのかもしれない。時が満ちて月も満ちる、そし

てまた欠けてゆく、繰り返す。そんな風にじゅんぐり、満ちたり欠けたりしながらまるで月のように成長してゆくのでしょうか。ラリベラは今、雨季を待つ乾季の中。

それでは、また。

## 11 2003年8月1日号掲載

今年のラリベラでの水不足は著しく激しかった。週1回だったはずの停電がいつの間にか週2回になり、しかも朝の6時から夜の10時までという長時間。これがエチオピア全域で実施されている。この水不足はかなりの深刻な問題として挙げられ、村長、水道局、その他様々な役職の人たちが集まり、何度も会議が開かれた。水不足によって今年の苗畑の苗木たちは、昨年と比べ物にならないくらい状態が悪かった。なぜなら、前述の会議において水を供給する優先順位が学校の苗畑よりも村へ、飲み水のほうへ行ったからである。私の家の前の水道も何度も止まり、3リットル入りのポリタンクにさえ、水がないという日が何日も続いた。しかし、これらの出来事によって、色々なことに気づくことが出来たのである。どれだけ水を使わずに生活できるか。水を分ける生活が始まり、そこから生まれるつながり、助け合い、そんなもの。雨季がやってくると、たまに水が濁るものの通常の営みが出来ようになり、おのずと停電もなくなった。ニューヨークの大停電も大変だったが、当たり前にも馴れすぎてしまった我ら地球人にはいい学びだったかもしれない。

時代は、遡ること1955年7月19日。まだハイ

レセシエ皇帝の時代。その日は、エチオピア全域においての「Planting Tree Day」といって、1人が1本の木を植えましょうという日だった。皇帝が倒れ政権が変わり、そんな日もどこかに消えてしまった。——それから48年後、2003年7月19日。デブラゼートというエチオピア南部においてこの日が復活したのである。（企画したのはクリスティの友達！）

大統領、NGOの代表らが集まり式典が行われた。日と同じくして、ラリベラでも小さなセレモニーが行われた。アレンジはFFFスタッフとクリスティ。少ない人数ではあったが、村長をはじめとする村の主要な人達に出席してもらい中央公園に記念植樹が行われた。この日が本当に復活したら——世界はそんなに一気に変容しない。見えなかったり、地道な活動がいつの日かいつの間にか実となり、形として少しずつ変化をもたらす気がする。きっと木の成長に似ている。植物みたいにゆっくりと育てていくこと。だから水もあげなきゃいけないし、何かを通して育てていかなきゃいけない。それが教育だったり、フー太郎だったりするのではないだろうか。

## 12 2003年10月1日号掲載

皆様、いかがお過ごしでしょうか？

ラリベラでは、雨が1日ごとに降っては止みを繰り返して、これから本格的な乾季に入ろうかというところ。今年は任期が最後の年にもあたるので、エチオピアの新年を見たいあまりに、わがままを言って出発を早めてもらいました。私たちにとてもお正月がなんとなくワクワクするものであるように、エチオピアにおいても暦は異なるものの（9月11日が新年）気持ちは同じよう。村中が村人が新年に向けてなん

となく浮き足立っているなぁという印象を受けました。新年のことを『ウンコタタシ』と呼び、日本人にはなんとなく受け入れづらい呼び名。一度は必ず聞き返したくなるぐらい。村中にマスカルという黄色い、ちょうどマーガレットのような小さい花が咲き乱れ、新年を彩ります。子供たちはそのマスカルを小さな花束にし、♪ウンコタタシー♪と歌いながら各家庭を回ります。そんな習わしが、今現在も失われずに行われていることにしばしば心が和んだ私

だったのでした。

そんな新年にも厄介なことが一つ。エチオピア人でさえ「コシャシャ、マスカル！」と叫ぶくらい、埃がすごい。そしてそれだけでなく、ノミと南京虫のオンパレード。これにはびっくり！えっ？私だけじゃないの？エチオピア人も食われていたのね！2年目の驚異。食われなくなったアレは、まやかしだったのだ。いつもの小さな部屋に就寝すると、あの1年目のかゆさがあれよあれよという間に蘇ってきた。

初心に帰るとはこのこと。あーこんなにかゆかったんだあ…。初めは対処の方法も分からずにされるがままだったが、まさに経験はモノを言う。以前の

ような状態にならないような対処法を持ちえていた。しかし、夜中に反応して電気のスイッチに手を伸ばす日は、もう少し続きそうである。

何はともあれ、こうしてラリベラでの日々がまた始まろうとしている。高校での環境クラブの活動が新校舎の建設のために苗畑がつぶされたことによってなくなってしまった。そのかわりではないが、赴任して早々、ナクテラ小学校から環境クラブの活動の要請があがってきたとの報告を受けた。ラリベラの村からは少し遠いのだが、そんな所にも種は飛び、芽を出そうとしている。今年は何が私たちを待っていてくれるのか。

### 13 2003年12月1日号掲載

この度、私達フー太郎の森基金は正式な国際NGOとして、エチオピアで認定証を獲得した。そうこの獲得するという言葉が戦いにはふさわしい。そうなのです、これはまさしく綱渡りの如く忍耐と愛嬌を駆使した2年越しの戦いの結末なのでした。

査証（ビザ）がないという暮らしをこの春に数日間送った。査証がないということは、宙ぶらりん、何者でもない、不法滞在、国外追放とあまりいい響きの言葉は存在しない。ただ単に査証の期限が切れてしまい、移民局側は私の査証の延長を認めてはくれなかったのだ。

そこで手続きを進めているNGOの登録が早急に必要となったのだ。登録し、認証してもらうには、必要な書類をそろえて、提出。そして待つという至って簡単なもの。しかしこれが一筋縄ではいかない。——何故か。

そんなすったもんだで、私はこの春から初夏にかけて首都に長期滞在をし、ようやく労働許可証とIDカードというものを取得したのだ。このIDカードを取得した時は本当に心の底から嬉しかった。移民局を出て、カードを手にし、空を見上げた時、安堵のため息としばしの充足感が私を満たした。こ

のカードはエチオピア人と同じ扱いを様々な場所で受けられ、1年間有効なのである。空は青かった。雲がまばらに浮かんでいたと思う。あーこれで戦いは終わった…ふとそんな言葉がその時私の中から湧き上がった。

色々な人が助けの手を差し伸べてくれた。ラリベラの村長だったり、友人が紹介してくれたエチオピア人だったり…。しかし移民局が私の滞在を納得したのは、NGO登録の途中だという法務局が書いてくれたレターだった。それが今まで滞っていた流れを破り、また新たな流れを作り出したのだと思う。

それから夏の一時帰国をはさんで5ヵ月。私達はどうとう認定証を手にした。人にいわせると5ヵ月というのはとても短期間だという。しかし準備に2年も費やしているのだ。提出しては何が足りないと言難癖をつけられ、そうして2年の月日が過ぎていった。来訪者には親切なエチオピア人。言葉少なくとも、アムハリックを話すと珍しがってみんな可愛がってくれた。ありがとうと心の中で何度言っただろう。ひとつの戦いが終わった。がしかし、しばしの休息を経て、また動き出すことにしよう。この過渡期のなかへ——。



## 14 2004年2月1日号掲載

この新年、2004年1月1日に中央公園の一角に喫茶店が開店した。村の中の貧しい女性が集まり、組織を作り運営している。その名をアムハリック（現地語）で「サラーム セツウォッチ マハブル」と言う。この協同体を立ち上げるまでの歴史を少し紹介しましょう。

女性協同組合の計画は、2003年の年間計画を立てた時点で、もうすでに決定していた。が、喫茶店の内装の終了を待たせたりしている内に時はどんどん流れ、2003年も終わりに近づこうとしていた。

そんな時、滞っていた流れを破るかのような事件が起きた。9月に公園が完成した時点で、この公園の管理の全てを自治体に委託したのだが、なんとこの自治体が公園の管理権限を譲与するという告知を村に出したのだ。手芸教室の帰り道、村人に呼びとめられた。「自治体が公園の管理者を募集しているみたいだよ」と。一瞬青ざめた。似たようなことがなかったわけではない。つい1ヵ月前にも、あるビジネスマンが公園の喫茶店を買い取りたいと申し出てきた。その時も私達は固く断った。この喫茶店がかねてから、相互扶助が出来るよう貧しい立場にあ

る女性を集め、運営してもらった。告知から3日後には募集が締め切れ、その場で管理者が決定されるという。自治体に直に話しに行っても、らちは明かなかった。私達に打つ手立ては無く、理事長・香織さんに連絡する他になかった。

香織さんが村長に電話をして下さり、趣旨を説明したところ村長はそれを承諾し、すぐにこの告知の取りやめを決定してくれた。手立てがなかった私たちは、窮地を救われた。それから、すぐ試験を施し女性協同組合の組織作りを急いだ。試験の時、参加者の中には私たちの趣旨を理解できず、途中で退席する人もいた。給料がない、ということ。仕事が欲しくて来ているのに給料がないということは理解しがたかったようだ。それでもいいという女性達が今、生き残りの協同組合を支えている。

喫茶店の台所にはケニア産のかまどがある。ケニアで買ってきた訳ではなく、同じ仕様で作ったのだ。これで薪の消費量を抑えられるということ。私達はあの公園が、新しいライフスタイルを発信する根源になればと心から願っている。